

2024 年 5 月

食料安全保障月報

(第 35 号)



令和 6 年 5 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024 年 5 月食料安全保障月報（第 35 号）

目 次

概要編

I	2024 年 5 月の主な動き	1
II	2024 年 5 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「ウクライナ及びロシアの生産・輸出動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 1
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 2
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 3
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 5
5	食品小売価格の動向	1 9
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 0
7	FAO 食料価格指数	2 2

今月のコラム

「ブラジル便り③：ブラジルの代表的料理」	2 3
----------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 2.5%増の 50.6 百万トン
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 8.3%増の 34.6 百万トン
	＜豪州＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 11.5%増の 29.0 百万トン
	＜EU27＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 4.2%減の 127.0 百万トン
	＜中国＞	2024/25 年度の生産量は 140.0 百万トンと史上最高の見込み
	＜ロシア＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 3.8%減の 88.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 8.7%減の 21.0 百万トン
2	とうもろこし	
	＜米国＞	2024/25 年度の生産量は、前年度より 3.1%減 9
	＜ブラジル＞	2024/25 年度の生産量は増加の見通し
	＜アルゼンチン＞	2024/25 年度の生産量は、前年度から減少する見通し
	＜中国＞	2024/25 年度の生産量は、前年度から増加する見通し
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は、前年度より 12.9%減
3	コメ	
	＜米国＞	2024/25 年度の生産量は増加の見込み 1 5

<インド>	2024/25 年度の生産量は史上最高の見込み
<中国>	東北部は4月末で作付終了、東部・南部の早稲の生育は順調
<タイ>	乾期米の収穫は完了、一部地域で雨期米の作付けを開始
<ベトナム>	南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）は海水侵入で単収減少

II 油糧種子

大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 1
<米国>	2024/25 年度の実産量は、前年度より 6.9%増
<ブラジル>	2024/25 年度の実産量は前年度より増加
<アルゼンチン>	2024/25 年度の実産量は、前年度より増加
<中国>	2024/25 年度の実産量は、前年度より減少する見通し
<カナダ>	2024/25 年度の実産量は 6.9 百万トンの見込み(AAFC)

(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2024/25 年度)・・・	2 7
(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・	2 7
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・	2 8

特別分析トピック

「世界の食料需給の動向」

【利用上の注意】

表紙写真：カナダのオンタリオ州の大豆作付けの様子。5月は降雨が多く、作物の作付作業に遅れが生じているという。（オンタリオ州 2024 年 5 月 4 日）。

(概要編)

I 2024 年 5 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2024/25 年度の作況について、北半球では冬小麦が出穂期から登熟期、とうもろこし等その他の作物は作付期から発芽期を迎えている。なお、南半球では 2023/24 年産の作物が収穫期を迎えている。

品目別にみると、5 月の米国農務省 (USDA) の需給報告によれば、2024/25 年産の小麦については、ロシアや英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、インドや中国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する 4 者合意（黒海穀物イニシアティブ）については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU の東欧経由での輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル、EU 等で単収・収穫面積ともに前年度より増加するものの、米国で収穫面積の減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。大豆については、ブラジルや米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視する必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に食肉価格の上昇等により、3 月の 118.8 から、4 月(最新値)は 119.1 に上昇（参考：2023 年 4 月 128.7、2022 年 4 月 158.4、2021 年 4 月 122.1、2020 年 4 月 92.5）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値と同程度の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021 年 7 月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024 年 5 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の5月需給報告によれば、2024/25年度の小麦の生産量は、主として収穫面積が減少することから前年度より9%減少し2,100万トンとなる見込み。とうもろこしの生産量も、収穫面積・単収ともに減少することから前年度より13%減少し2,700万トンとなる見込み。2024/25年度の小麦の輸出量は、生産量と期首在庫の減少を受け、前年度より20%減少し1,400万トンとなる見込み。とうもろこしも同様に、前年度より8%減少し2,400万トンとなる見込み。

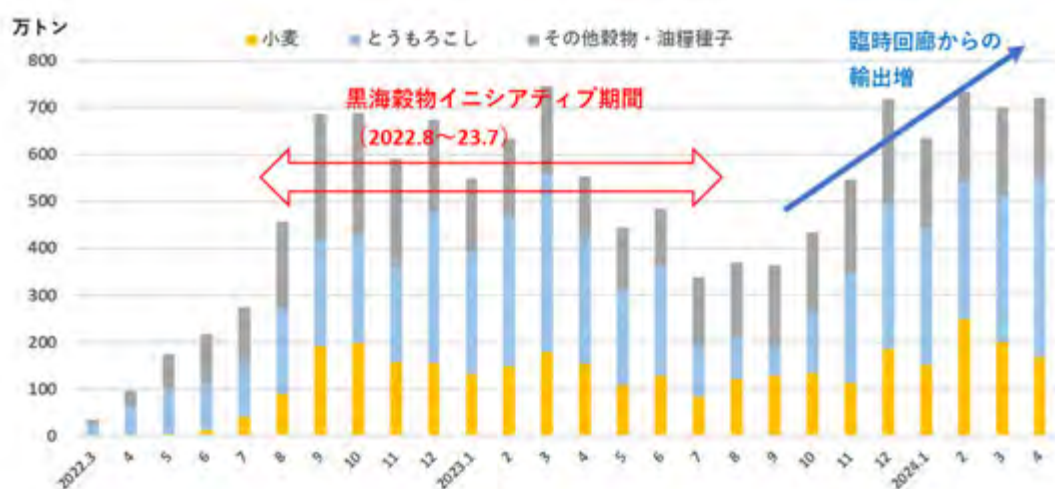
ウクライナ農業政策食料省によれば、4月末現在、2024年産の冬小麦は平年より10～14日早いペースで生長が進んでおり作柄は概ね並み。春小麦は出芽期から分げつ期を迎えており作柄は概ね並み。とうもろこしの作付作業は4月下旬から5月上旬にかけて最盛期を迎える。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ビブジェヌイ港）から輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績は、穀物・油糧種子6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」をIMO（国際海事機関）に通報、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が増加している。ウクライナ農業政策食料省によれば、2023年8月～24年4月までの穀物・油糧種子の輸出量は5,222万トン（うち小麦1,451万トン、とうもろこし2,103万トン）（参考）。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2024年4月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 米国：2024/25 年度のとうもろこしは減産も、小麦・大豆は増産の見通し

米国農務省の5月需給報告によれば、2024/25年度の米国産とうもろこしの生産量は、収益性の高い大豆に作付けがシフトすることから、前年度より3.1%減の3億7,746万トンとなる見込み。一方、大豆は収穫面積と単収の増加に伴い、前年度から6.9%増の1億2,111万トンとなる見込み。また、小麦は収穫面積と単収の増加から、前年度より2.5%増の5,056万トン。

輸出量については、とうもろこしは5,588万トンと、アルゼンチン、ウクライナ及びブラジルの輸出減から前年度より2.3%増、過去5年平均より1.8%増となり、2年連続で世界最大の輸出国となる見込み。小麦は2,109万トンと、生産量の増加と価格競争力の高まりから前年度より7.6%増も、過去5年平均に比べ8.5%減となる見込み。大豆は4,967万トンと、世界全体の搾油用需要が増加するため前年度より7.3%増も、過去5年平均に比べ6.8%減となる見込み。

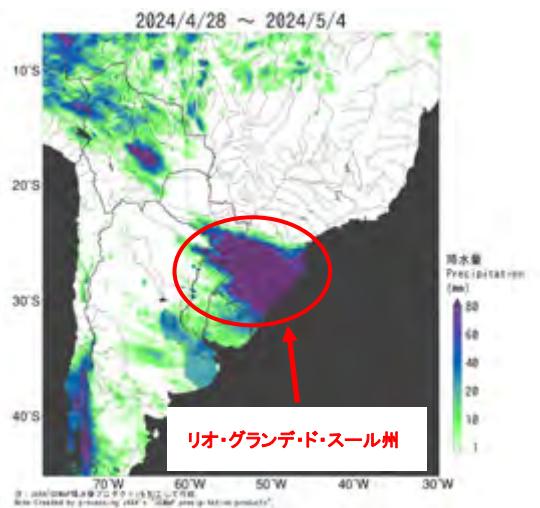
2 ブラジル①：リオ・グランデ・ド・スール州で洪水による被害が拡大

ブラジル食料供給公社の5月見通し(2024.5.14)によれば、2023/24年度のブラジル産とうもろこしの生産量は、作付面積・単収ともに減少したことから、前年度より15.4%減の1億1,164万トンとなる見込み。現在、夏とうもろこしは収穫作業が進展しており5月5日時点の収穫進捗率は63.1%。冬とうもろこしは5月より収穫作業が始まる。大豆の生産量は、作付面積は増加したものの単収が減少したことから、前年度より4.5%減の1億4,768万トン。5月5日時点の収穫進捗率は94.3%。

リオ・グランデ・ド・スール州では、4月最終週から暴風雨に見舞われ、州の生産地域の大部分で洪水が発生。まだ収穫されていないとうもろこしや大豆の単収が損なわれているほか、すでに収穫され保管されている作物にも損失が発生している。

リオ・グランデ・ド・スール州のとうもろこし生産量のブラジル全体に占める割合は5%程度であり、その影響は限定的とみられる一方、大豆の生産量は約15%を占めるため、収穫期は終盤を迎えているものの被害の拡大による影響が懸念される。

図：南米の降水量(2024.4.28~5.4)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム

ブラジル②：日伯農業・食料対話高級実務者会合を開催

令和6年5月23日及び24日、農林水産省はブラジル農業・畜産省と「日伯農業・食料対話高級実務者会合」を開催した。会合の中で、日本からは、ブラジルから日本への穀物の安定供給の観点で、食料需給がひっ迫する等の不測時に備え、両国間で情報交換・意見交換を行う対話の場を提案し、9月のMOU締結に向けて議論を進めていくことで合意した。また、日本企業が投資する穀物積み出し港などのインフラ整備事業を円滑に進めるため、今後、二国間で省庁横断的に議論していくことを確認した。ブラジルからは、G20農業大臣会合に係る情報提供の他、両国間の貿易関係強化、気候変動、持続可能な生産システム構築等に向けた技術協力について提起が行われた。両国は、本年9月にブラジルで開催が予定されているG20農業大臣会合に合わせ、閣僚級の日伯農業・食料対話の開催を目指すことで一致した。

3 英国：「英国食料安全保障指数」公表

2024年5月14日、英国政府は、3年ごとに公表される「英国食料安全保障報告書（UKFSR）」を補完するものとして、「英国食料安全保障指数（UK Food Security Index 2024）」を公表した。現在の英国の食料安全保障の状況を評価するために、必要なデータと分析を提供するものである。

この指数は、UKFSR2024（今年後半に発表予定）の幅広い指標群から選択された9つの指標（世界の消費に対する食料供給量、世界の穀物・大豆の国際貿易率、生産/供給率、農業の全要素生産性、農地利用、エネルギー・肥料価格、ビジネス投資、生物防疫リスク、食品サプライチェーン関係者に対する消費者の信頼感）を取り込んでおり、現実の食料安全保障は、食料需給、国内外の動向、投入と算出、食の安全に対する消費者の認識や信頼感など、相互作用する様々な要因によって形成されており、単一の指標やテーマに還元されないと説明している。

なお、現在の英国の食料安全保障は、世界のサプライチェーンの混乱という困難な時期から抜け出しつつあり、概ね安定した状況であると評価している。

4 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、運送各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。また、パナマ運河については、降雨不足による水位低下に伴う運航制限が継続しているが、2024年4月15日、パナマ運河庁は、3月中旬以降のまとまった降雨により水不足が一定程度緩和したことを受け、同16日から通行枠を増加すると表明した。5月7～15日には1日24隻、同16日からは31隻、6月1日には32隻と順次制限を緩和する予定である。

我が国の穀物輸入に関し、小麦は主に米国・カナダ西海岸及び豪州から輸入しており、上記2つのルートを通過しない。また、ブラジル産穀物等の多くを喜望峰経由で輸入している。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、通常、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多い中、最近のパナマ運河の水位低下により地中海→スエズ運河→紅海→インド洋経由のルートを選択したケースもあったが、最近の中東情勢を受け、再度、喜望峰や米国西海岸（PNW）経由に切り替えざるを得なかったとみられる。喜望峰経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。PNWの港からとうもろこしを積み込む動きも一部に見られる。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



II 2024 年 5 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、4 月末、210ドル/トン台半ばで推移。5 月に入り、ロシアにおける乾燥及び霜害による減産懸念から値を上げ、5 月中旬現在、240ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、4 月末、170ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、米中西部での作付け遅延及びブラジル南部での洪水被害を受けて、180ドル/トン台前半まで上昇。その後、米国農務省の穀物需給報告を控えたポジション調整から170ドル/トン台半ばまで下落したものの、米国農務省の穀物需給報告での期末在庫量が市場予想を下回ったことから上昇し、5 月中旬現在、180ドル/トン台前半で推移。

コメは、4 月末、610ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、乾季米の収穫が終盤を迎えているものの、市場への流入が減速していることや、5 月末までにインドネシアがタイから11万トンを入力すること等から値を上げ、5 月中旬現在、660ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、4 月末、420 ドル/トン台前半で推移。5 月に入り、ブラジル南部での洪水被害を受けて 450 ドル/トン台前半まで上昇。その後、米国農務省の穀物需給報告を控えたポジション調整から 440 ドル/トン台前半まで下落したものの、ブラジル南部での洪水被害が長期化していることを受けて上昇し、5 月中旬現在、440 ドル/トン台半ばで推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 1.1%増の 28.38 億トン。消費量は、前年度より 0.9%増の 28.42 億トンとなり、4 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り 27.1%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.38 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメいずれも増加し、穀物全体で増加となり、28.42 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで増加も、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、5.03 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.69 億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.87 億トン。消費量は前年度を上回り 6.65 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 21.8%となる見込み。

(注：数値は 5 月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報: ウクライナ及びロシアの生産・輸出動向

2024/25年度のウクライナ産小麦の生産量は、耕作面積が大幅に減少することから、前年度に比べ9%減少し2012/13年度以来の低い水準となる見込み。一方、ロシア産小麦の生産量は前年度に比べ4%減少するものの過去3番目の水準となる見通し。輸出については、ウクライナはEU向け、ロシアは中東・アフリカ向けのシェアを拡大している。2022年2月のロシアのウクライナ侵攻から現在に至る両国の生産・輸出動向についてまとめた。

注：文中の「2024/25 年度」等は穀物年度で、ウクライナおよびロシアの小麦は 2024 年7月から2025 年6月、とうもろこしは 2024 年10月から 2025 年9月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P.27 参照)。

1 ウクライナ産小麦・とうもろこしの生産・輸出動向

(1) 生産動向

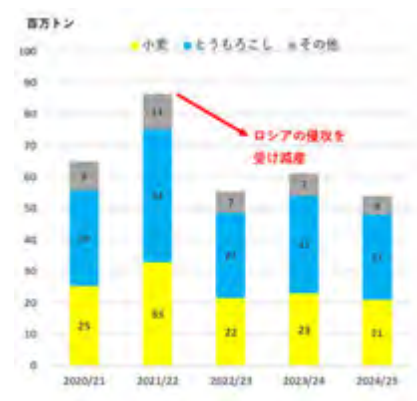
米国農務省（USDA）の5月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、収穫面積、単収ともに減少することから、前年度より 8.7%減少し、2,100 万トンと 2012/13 年度以来の低い水準となる見込み。ロシアの侵攻前の 2021/22 年度と比較すると 36%の減産となる。また、とうもろこしの生産量も、小麦同様、収穫面積、単収ともに減少することから、前年度より 12.9%減少し 2,700 万トンとなる見込み。侵攻前の 2021/22 年度と比較すると 36%の減産となる。

USDA の GAIN レポートによれば、ウクライナ産小麦及びとうもろこしの生産者は、2022 年 2 月のロシアの侵攻以来、肥料の高騰により 2 年連続で採算が取れない状態が続いている。一方、大豆はとうもろこしに比べ肥料コストの負担が少ないため、2023/24 年度に利益を上げており、2024/25 年度も大豆・ヒマワリ種子等の油糧種子で利益を生むと予想されている。このことが農家の作付け判断に影響を及ぼし、2024/25 年度は、小麦・とうもろこしから大豆・ヒマワリ種子等の油糧種子へ作付けがシフトすると予想される。

(2) 輸出動向

USDA の5月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は、収穫面積と単収の減少による生産量の減少や旺盛な輸出需要による期首在庫の減少を受けて、前年度から 350 万トン減少し 1,400 万トンとなる見込み。ロシア侵攻前の 2021/22 年度と比較すると 26%の減少となる。とうもろこしの輸出量も、収穫面積と単収の減少による生産量の減少や旺盛な輸出需要による期首在庫の減少を受けて、前年度から 200 万トン減少し 2,400 万トンとなる見込み。侵攻前の 2021/22 年度と比較すると 11%の減少となる。

図1 ウクライナの穀物生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.5.10)
※その他は他の穀物（大麦等）

図2 ウクライナの穀物輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.5.10)
※その他は他の穀物（大麦等）

現地調査会社のデータによれば、2023年7月から2024年4月までの小麦の輸出量は1,578万トンで、国別にはスペイン 512 万トン、エジプト 132 万トン、トルコ 106 万トン、インドネシア 106 万トンの順となっている。ロシアの侵攻前は、主にアジア地域及びアフリカ諸国向けに輸出されていたが、侵攻後は、輸送コストで優位性がみられる近隣の EU 諸国向けへの輸出が増加している。

2023年7月から2024年4月までのとうもろこしの輸出量は2,291万トンで、国別にはスペイン 482 万トン、中国 383 万トン、エジプト 298 万トン、イタリア 222 万トンの順となっている。ロシアの侵攻後は、小麦と同様に EU 諸国向けの輸出が増加している。

表1 ウクライナの小麦、とうもろこしの輸出時期別輸出先国シェア

(単位：％、万トン)

	2020年7月－2021年6月 ロシア侵攻前		2022年8月－2023年6月 黒海穀物イニシアティブ期		2023年7月－2024年4月 臨時回廊期	
小麦	インドネシア	15.7	トルコ	21.4	スペイン	32.4
	エジプト	14.8	スペイン	15.5	エジプト	8.3
	パキスタン	8.4	ルーマニア	15.1	トルコ	6.7
	バングラデシュ	6.8	バングラデシュ	6.6	インドネシア	6.7
	モロッコ	6.5	ポーランド	5.3	ルーマニア	6.3
	その他	47.9	その他	36.0	その他	39.4
	月平均輸出量	138.7		150.6		157.8
とうもろこし	中国	38.2	中国	19.7	スペイン	21.1
	オランダ	10.0	ルーマニア	15.6	中国	16.7
	エジプト	9.7	スペイン	11.2	エジプト	13.0
	スペイン	8.2	エジプト	7.4	イタリア	9.7
	イラン	5.3	イタリア	7.3	オランダ	7.3
	その他	28.6	その他	38.8	その他	32.2
	月平均輸出量	192.3		256.5		229.1

出典：APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省が作成 ※ピンクはアジア、青は EU

注：四捨五入による誤差のため、シェアの合計が 100%にならない場合がある。

図3 オデーサ港から出港のルート

(3) 臨時回廊による輸出と EU の免税措置の延長

2022年2月のロシアの侵攻後、ウクライナの穀物輸出は一時的に途絶えたものの、国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等からの輸出が再開された。同イニシアティブはロシアが離脱する2023年7月17日まで続いた。

同イニシアティブ停止以降は、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する「臨時回廊」が確立され現在に至る。大部分の穀物輸出は臨時回廊を通して行われており、現在も断続的に行われている EU 隣接国における農業団体やトラック運転手による国境検問所の封鎖等の抗議活動の影響は軽微とみられる。



出典：現地調査会社調べ
※緑は臨時回廊、ピンクは穀物イニシアティブ

現在、ウクライナにとって最大の輸出国は EU となっている。2024 年 5 月 13 日、欧州理事会は、EU へのウクライナ産農産物に対する輸入関税と割当の一時停止措置（2022 年 6 月に導入）を、2025 年 6 月 5 日まで延長することを承認した。これに併せ、EU 市場を保護するため 2 つのセーフガードメカニズムが導入された。1 つは、既存のセーフガードメカニズムの強化版で、定期的なモニタリングに基づき、特定の条件を満たした場合に発動される。もう 1 つは、ウクライナ産のとうもろこし、えん麦、鶏、卵、砂糖、ハチミツ及びひき割り穀物の輸入量が 2021 年下期から 2023 年の年間平均値を上回った場合、関税割当が自動的に再導入される。

なお、報道によれば、EU による輸入関税と割当の停止措置の 1 年延長が欧州理事会で承認されたとはいえ、EU 内部での不協和音は依然として存在する。全ウクライナ農業フォーラムのジドゥフ会長は、5 月 13 日の欧州理事会における投票で、ハンガリーとポーランドは反対票を投じ、ブルガリアは棄権したことを指摘。欧州理事会の議長国が今年後半はハンガリー、来年前半はポーランドになるため、ウクライナの対 EU 交渉は今後も難航するとみられる。

2 ロシア産小麦の生産・輸出動向

（1）生産動向

USDA によれば、2024/25 年度のロシア産小麦の生産量は 8,800 万トンと、豊作だった前年度より 4 % 減少するものの、過去 5 年平均より 5 % 上回り、過去 3 番目の水準を維持する見込み。ロシアの小麦生産は主に欧州部で栽培される冬小麦とシベリア地域で生産される春小麦であり、冬小麦は 6,400 万トンで約 7 割を占める一方、春小麦は 2,400 万トンの見通し。なお、USDA によるロシアの生産予測は、クリミアの生産量を除外している。

5 月上旬、ロシア南西部で季節外れの寒波による気温低下と降霜により、農作物に大きな被害をもたらしている。16 日、ルト農業大臣は、寒波による作物の枯死の面積は農作物全体の作付面積の約 1 % に相当する 83 万ヘクタールになると述べた。

（2）輸出動向

USDA によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は、生産量と期首在庫の減少により、史上最高を記録した前年度から 150 万トン減少し、5,200 万トンとなる見込み。輸出量は前年度より若干減少するものの、過去 2 番目の水準を維持するとともに、世界最大の小麦輸出国であることに変わりはない。

現地調査会社によれば、現在、ロシアの穀物輸出は過去最高のペースで進んでおり、2023 年 7 月から 2024 年 4 月の穀物輸出量は、前年同期比 1,012 万トン増の 6,149 万トンを記録した。うち、小麦の輸出量は前年同期比 414 万トン増の 4,474 万トンで、輸出先国の内訳は、エジプト 710 万トン、トルコ 596 万トン、バングラデシュ 334 万トン、パキスタン 213 万トンの順となっている。また、2023/24 年度の小麦輸出は、前年度か

図 4 ロシアの穀物生産量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.5.10）
※その他は他の穀物（オーツ麦等）

図 5 ロシアの穀物輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.5.10）
※その他は他の穀物（オーツ麦等）

らの繰越在庫が多く、輸出が好調であることから、初めて生産量の半数を超え、56%に達する可能性があると思われる。

表2 ロシアの小麦の輸出先国シェア

(単位：％、万トン)

	2020/21年度 (2021年7月～2022年6月)		2021/22年度 (2021年7月～2022年6月)		2022/23年度 (2022年7月～2023年6月)		2023/24年度 (2023年7月～2024年4月)	
小 麦	エジプト	21.0	トルコ	21.6	トルコ	19.2	エジプト	15.9
	トルコ	17.1	イラン	17.8	エジプト	17.0	トルコ	13.3
	バングラデシュ	5.0	エジプト	15.3	カザフスタン	6.5	バングラデシュ	7.5
	パキスタン	3.9	カザフスタン	6.6	サウジアラビア	5.5	パキスタン	4.8
	イラン	3.8	サウジアラビア	3.0	イラン	5.1	アルジェリア	4.3
	アゼルバイジャン	3.4	アゼルバイジャン	2.9	アルジェリア	4.4	カザフスタン	4.1
	カザフスタン	3.1	ナイジェリア	2.3	パキスタン	3.6	サウジアラビア	4.0
	ナイジェリア	3.1	スーダン	2.2	バングラデシュ	3.3	ケニア	3.4
	スーダン	2.9	シリア	1.9	スーダン	3.1	イエメン	3.4
	イエメン	2.3	イスラエル	1.7	リビア	2.8	インドネシア	3.1
	その他	34.3	その他	24.7	その他	29.6	その他	36.2
	月平均輸出量	332.1		274.2		404.0		447.4

出典：現地調査会社のデータをもとに農林水産省が作成 ※ピンクは中東、緑はアフリカ

注：四捨五入による誤差のため、シェアの合計が100%にならない場合がある。

(3) ロシアのウクライナ侵攻から現在までの動向

ロシアの主要な小麦輸出先国は、従前から引き続き中東及び北アフリカ諸国となっており、特にエジプト及びトルコがロシア産小麦の主要な市場となっている。こうした中、2021/22年度はイランへの輸出が大幅に伸びている。これは2021年にイランが深刻な干ばつに見舞われた中で、ウクライナ侵攻の対ロ制裁の影響により一時的にロシア産小麦の輸出が鈍化し、行き場がなくなった小麦がイランに向かったことも影響しているとみられる。

ロシアのウクライナ侵攻以降、ロシアの小麦輸出については、ロシアの主要な輸出先国はもと「友好国」が多い中東や北アフリカ諸国であり、これら友好国と決済スキームを構築したことにより、対ロ制裁の影響による輸出先の変更はほとんどなかった。ただし、制裁はロシア産小麦の価格を抑制する結果となり、ロシアは従来の主要市場への輸出を継続しつつも、低価格を武器に新市場（アフリカ、アジア、中南米）への販路拡大に力を入れており、このことが輸出量の増加に繋がっているとみられる。

報道（2024.4.19）によれば、ロシアはBRICSの農業部会で加盟国の代表らに、BRICSの枠組み内での穀物取引所の創設構想を提案し、賛同を得た。この構想は、2023年末にロシア穀物輸出者同盟がロシア農業省に提案したものであり、BRICS諸国は世界市場で大きなウェイトを占めている（世界の小麦生産量に占めるBRICSの割合は48%）にもかかわらず、価格はシカゴ市場で形成されているため、BRICS諸国の食料安全保障にとって望ましくない状況となっていると主張している。穀物輸出者同盟のゼルニン会長は、今年10月のBRICSサミットまでに穀物取引所の創設に関する事務的な問題を解決できるとの見通しを明らかにしている。

また、2024年5月16・17日、プーチン大統領は、大統領再任後の最初の外遊地として中国を訪問した。同16日の習近平主席との首脳会談では、対中関係の優先分野はエネルギー、農

業、ハイテク、インフラ、建設及び運輸であると述べた。会談後に署名された「包括パートナーシップと戦略的連携の進化に関する共同声明」において、両国は農産物及び食品の貿易拡大や農業分野の投資における協力を進めるとの意向が明記されている。

3 今後の動向

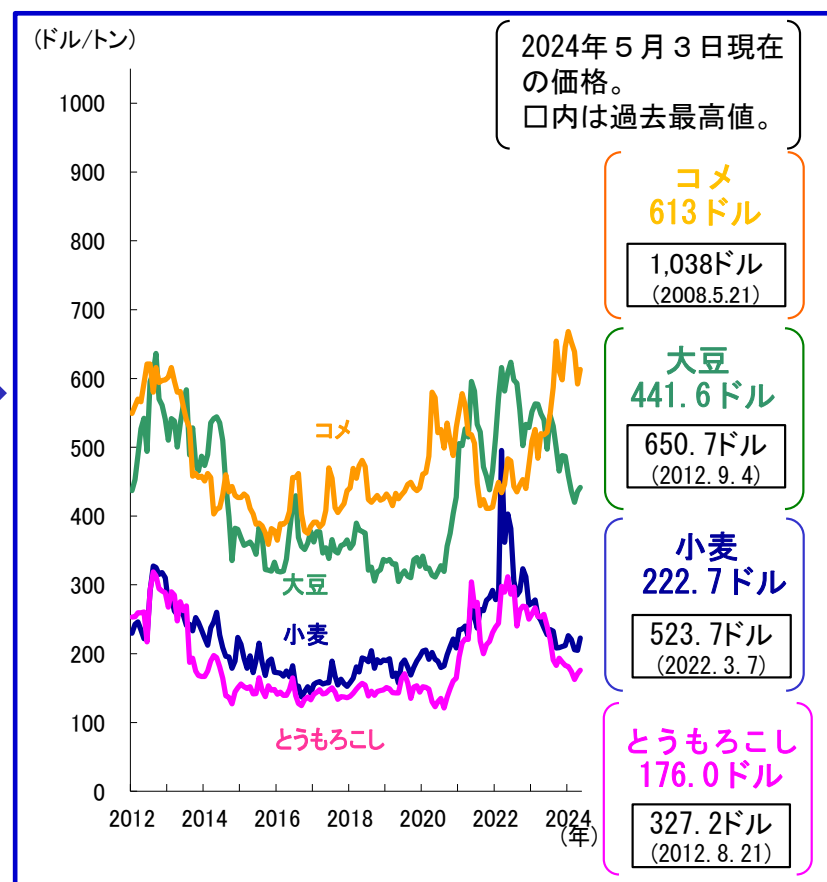
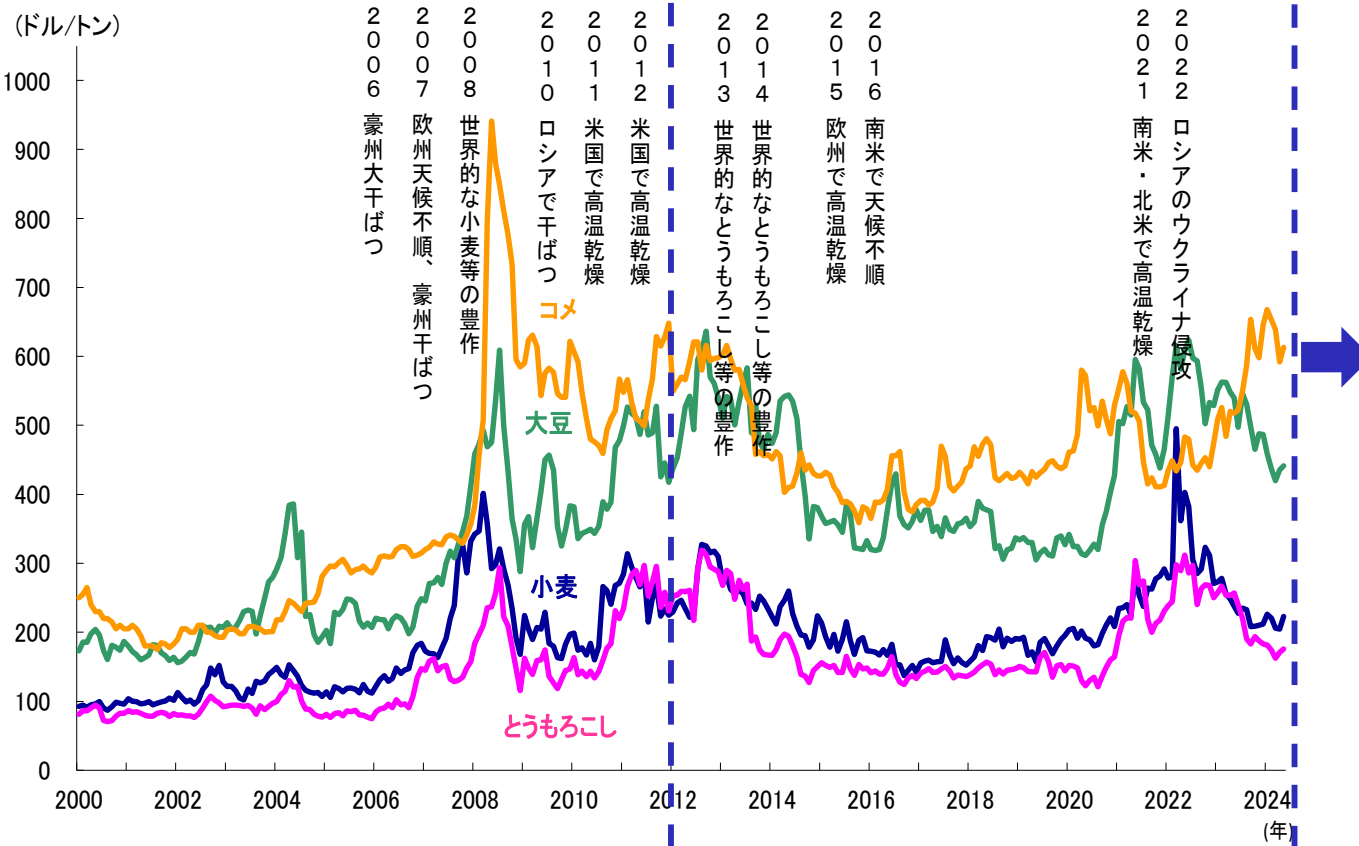
現在のところ、ウクライナは、臨時回廊により EU 諸国向けを中心に順調に輸出が行われている一方、ロシアは、中東やアフリカ向けを中心に輸出を拡大している。この傾向は 2024/25 年度も続くと思われるが、2024/25 年度は、消費量の増加に伴う輸入需要の伸びが予想される中東とアフリカで市場シェアを争うことになるだろう。

また、ロシアによるウクライナに対する軍事侵攻が続く中、プーチン大統領は中国や BRICS との関係を深めてきており、今後の動向を含め注視していく必要がある。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、4者協議による黒海からの一時的な輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時の高騰から低下も、南米の乾燥等から侵攻前と比較し依然として高水準。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



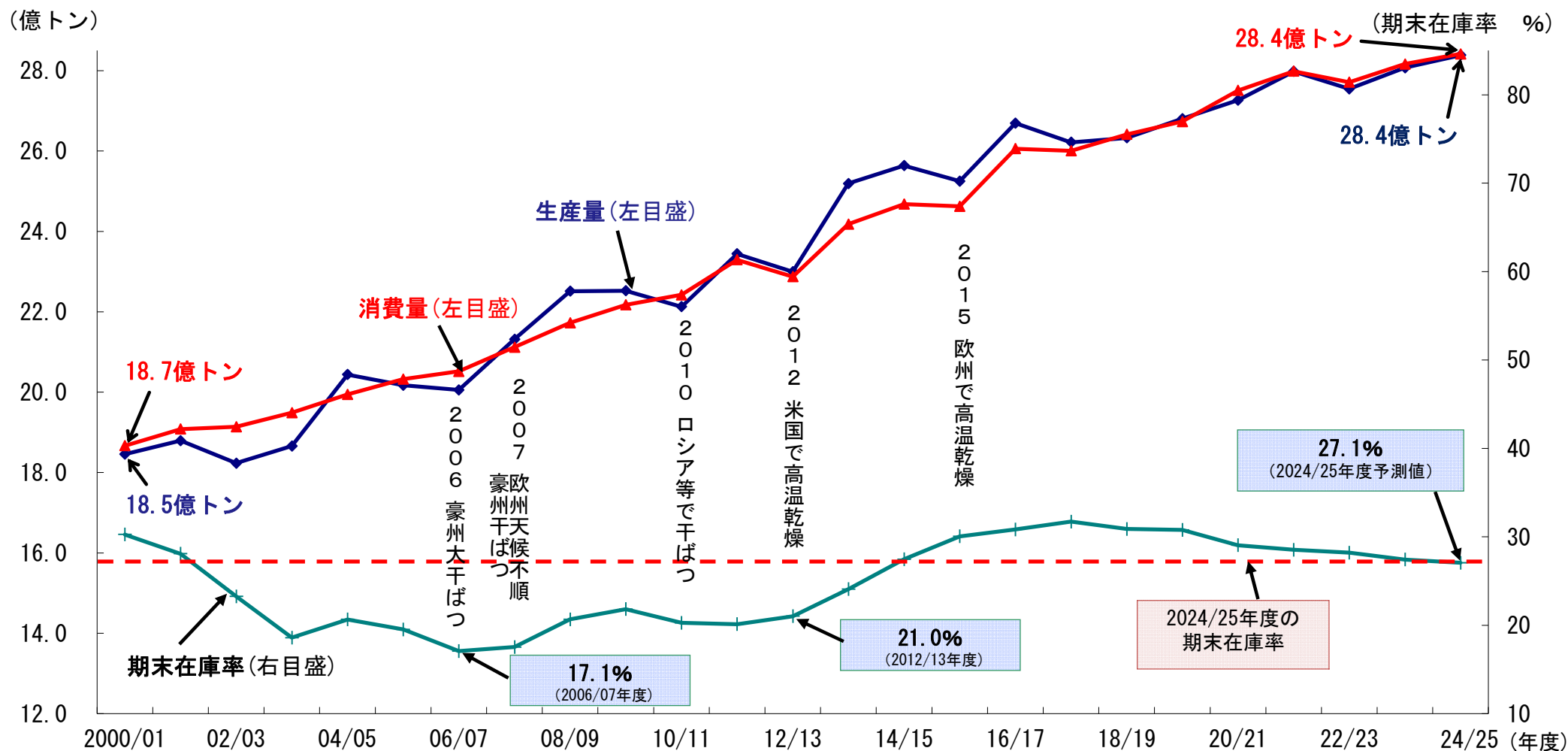
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメ価格は4月30日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

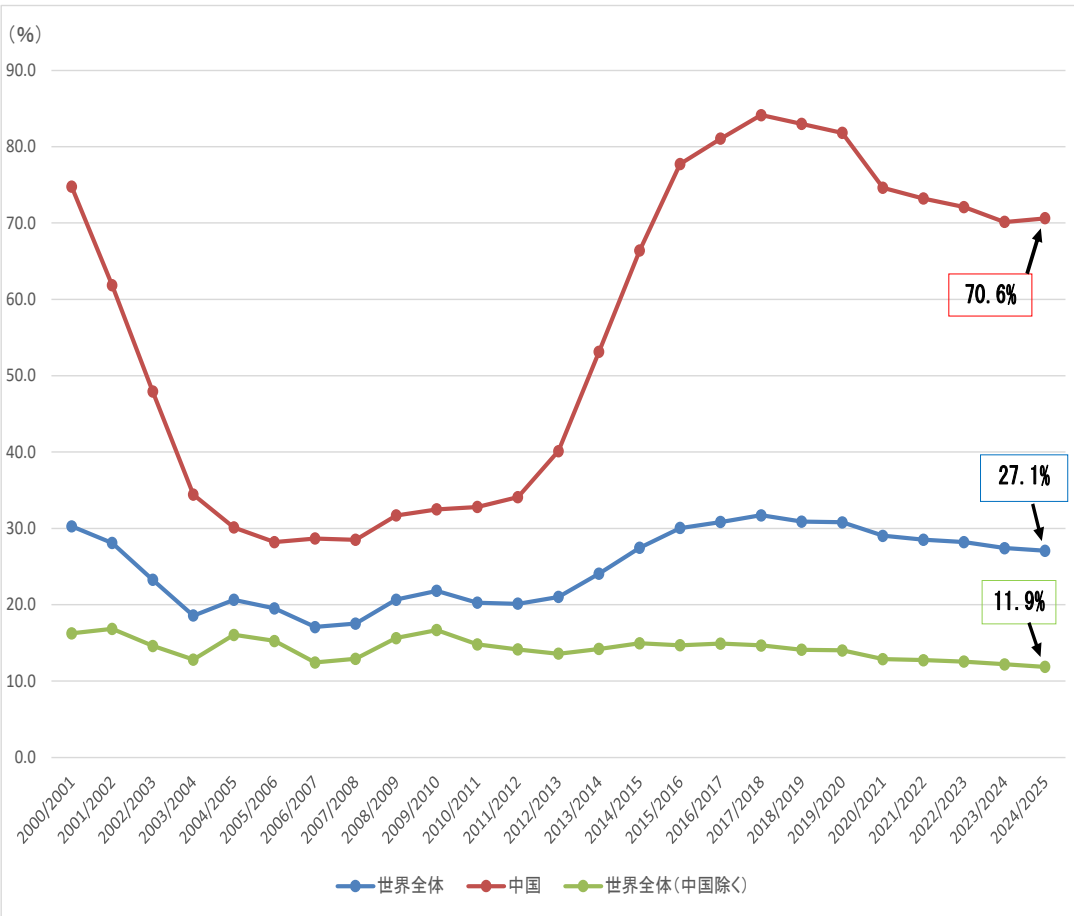


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(May 2024)、「PS&D」

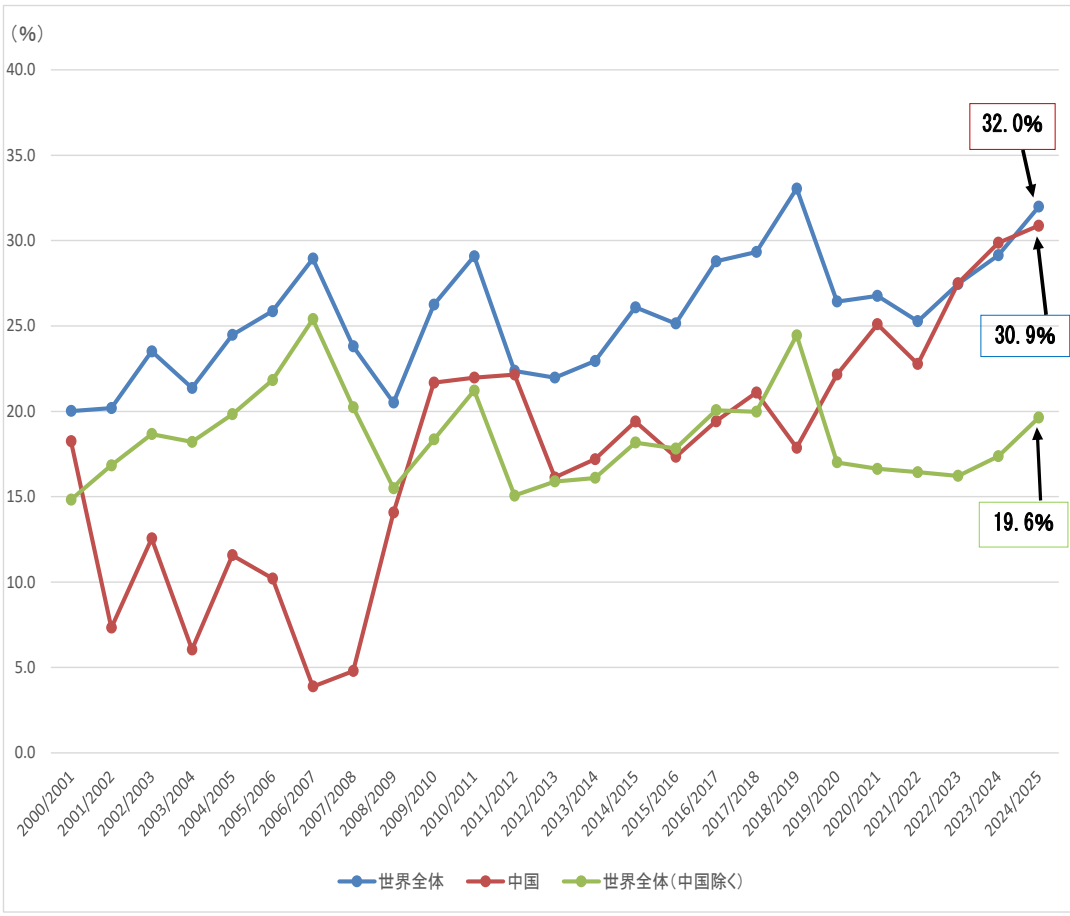
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



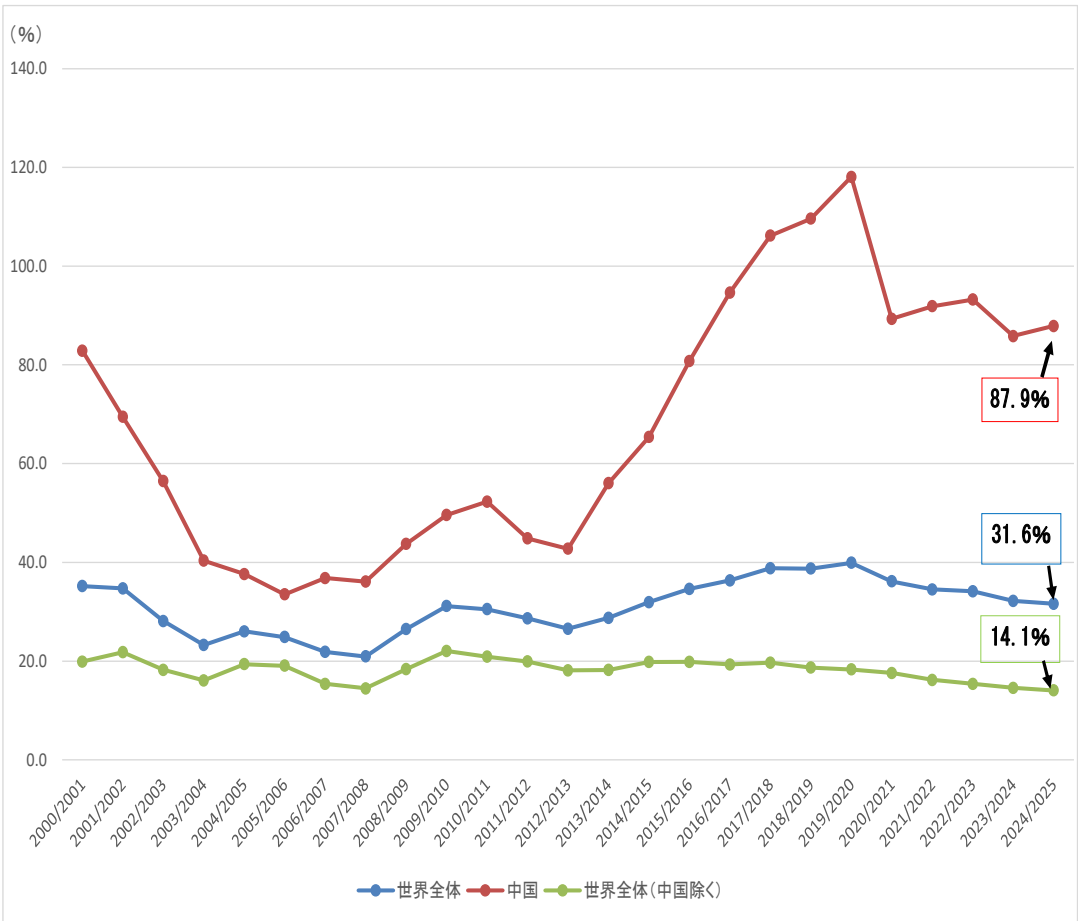
○ 大豆の期末在庫率の推移



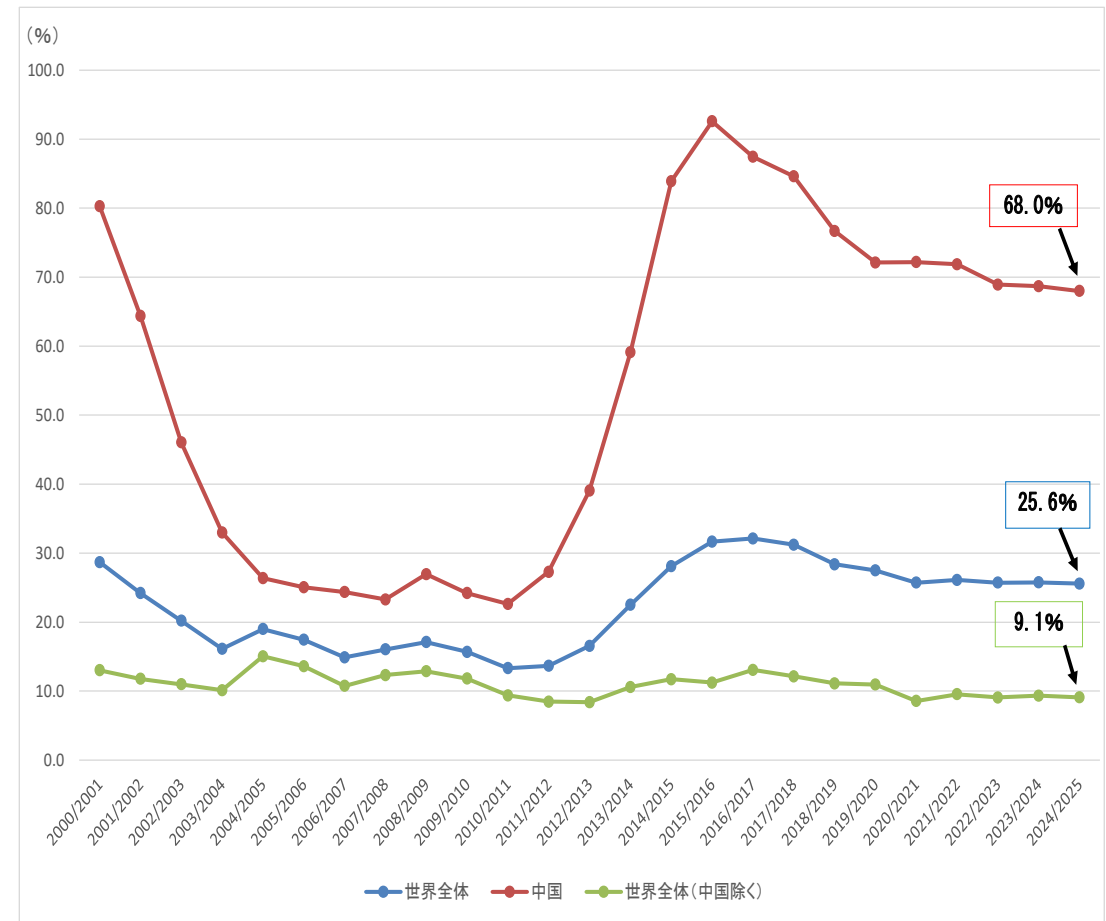
資料: 米国農務省「PS&D」(May 10, 2024)
 注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。
 2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100
 3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100
 4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



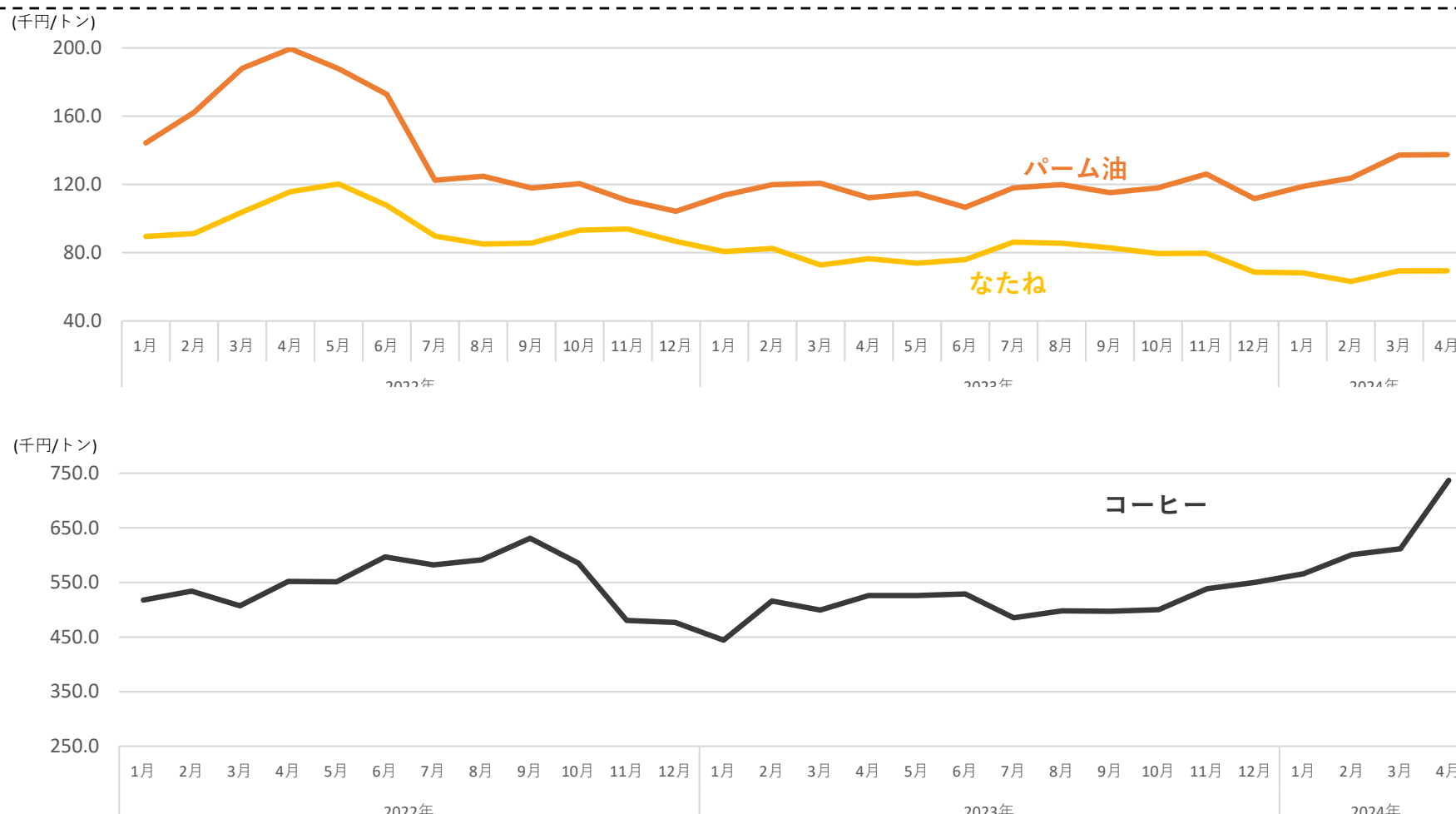
○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(May 10, 2024)
 注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。
 2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100
 3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100
 4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、**2021**年に主産地であるカナダで減産があったが、**2022**年以降は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（**2022**年**5**月**23**日解除）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも**2022**年の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、**2021**年以降、世界最大の生産国であるブラジルにおける天候不順による収穫量減少や世界的な物流の混乱等により、市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルにおける収穫量の回復等により、市場価格は一時下降したが、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、**2024**年以降は再び市場価格が高騰している。



2024年5月24日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
137.4 千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

なたね
69.3千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

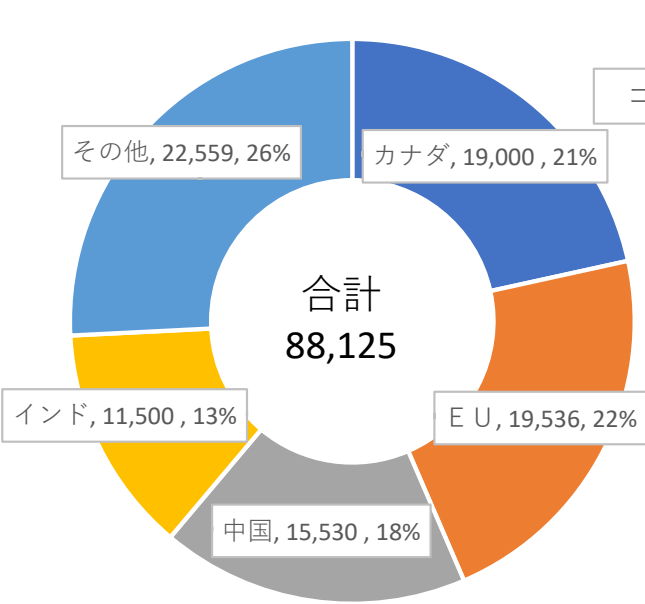
コーヒー
737.0千円/トン
737.0千円/トン
(2024.4)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

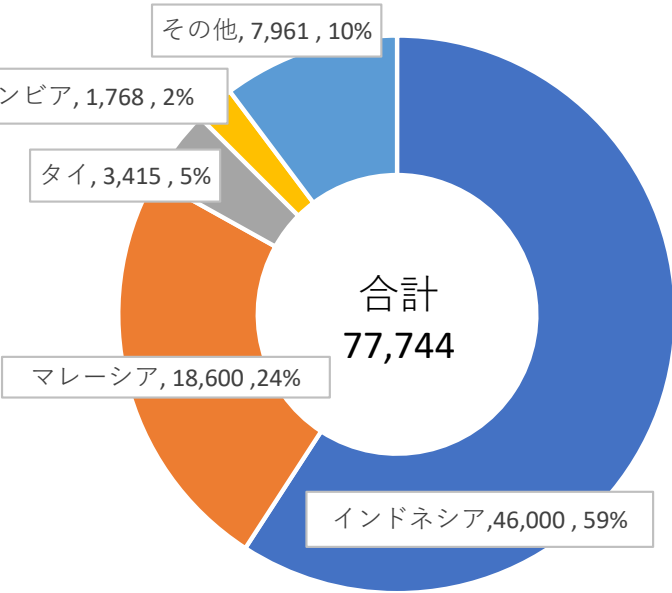
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2022/23）
（単位：千トン）



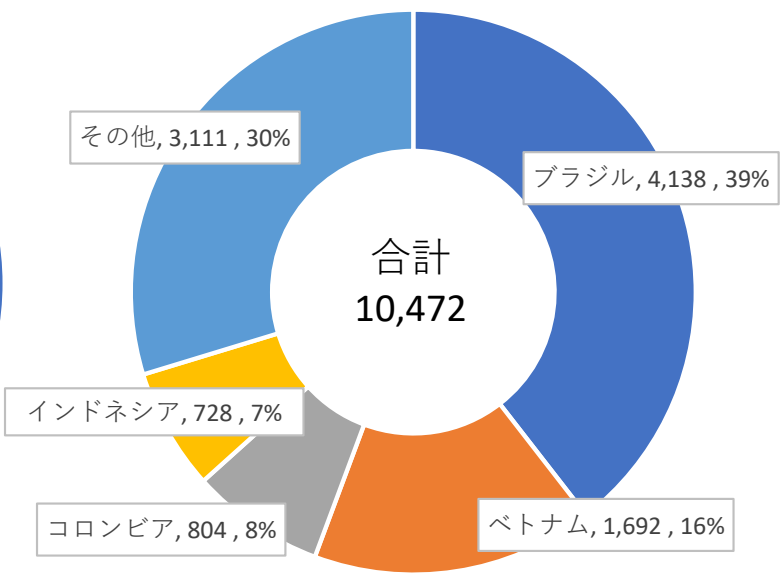
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

パーム油生産量（2022/23）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2023年 6 月時点

コーヒー生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2022年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,248	59.4%
オーストラリア	853	40.6%
その他	0	0.0%
合計	2,101	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	500	78.7%
インドネシア	135	21.3%
その他	0	0.0%
合計	635	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	112	28.7%
ベトナム	106	27.2%
コロンビア	47	12.1%
その他	125	32.1%
合計	390	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3								
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9								
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8								

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4								
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2								
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6								

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0								
前月 比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5								
前年 同月 比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1								

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年4月の国内の加工食品の消費者物価指数は113.3～153.7（前年同月比で-9.2%～9.5%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和5年11月～令和6年4月）

消費者物価指数（総務省）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5		R6				
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.2	101.1	100.0	99.2	110.3	123.2	122.7	122.1	121.8	122.1	121.9	6.2%
即席めん	95.3	98.5	100.0	100.1	107.6	122.9	122.2	122.2	125.2	123.9	123.5	8.4%
豆腐	98.8	99.1	100.0	101.3	105.3	117.0	117.2	116.9	117.5	117.6	118.0	3.1%
食用油 (キャノーラ油)	101.5	100.9	100.0	106.9	144.4	154.8	153.2	152.8	151.3	148.3	148.0	-9.2%
みそ	97.4	99.1	100.0	99.3	101.3	111.4	111.0	111.5	112.6	112.9	113.3	5.8%
マヨネーズ	100.8	100.7	100.0	105.6	125.6	153.9	154.7	153.5	154.2	153.4	153.7	3.4%
チーズ	100.9	101.3	100.0	98.7	107.5	135.0	131.3	133.0	132.7	134.5	135.3	1.0%
バター	99.5	99.9	100.0	99.9	99.2	111.3	115.5	119.0	119.1	118.8	120.2	9.5%
生鮮食品を 除く食料	97.9	99.0	100.0	100.2	104.1	115.2	115.1	115.0	115.1	115.3	115.5	3.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和5年11月～令和6年5月）

	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4	R5		R6						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.9	101.3	100.0	98.6	107.8	117.1	118.6	117.6	117.4	118.6	115.0	117.8	2.4%	5.8%
即席めん	92.4	97.9	100.0	99.2	105.6	122.2	121.6	119.8	121.0	121.0	117.3	119.8	2.1%	7.2%
豆腐	100.1	100.9	100.0	100.6	103.7	114.1	114.6	114.6	114.6	115.0	118.9	116.7	-1.9%	2.3%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	103.5	100.0	104.1	140.7	155.5	153.3	153.3	151.4	150.5	145.1	145.1	0.0%	-10.0%
みそ	96.6	100.4	100.0	99.2	100.1	110.0	110.6	110.2	110.4	110.2	106.7	108.1	1.3%	3.0%
マヨネーズ	97.9	103.1	100.0	102.2	117.7	143.7	143.7	144.1	144.4	143.4	140.3	138.6	-1.2%	-2.9%
チーズ	98.6	100.9	100.0	98.1	105.7	130.7	122.3	125.8	128.8	129.8	123.8	120.8	-2.4%	-7.3%
バター	99.0	99.5	100.0	99.8	99.1	110.5	115.0	118.3	118.5	118.5	119.7	119.4	-0.3%	8.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年6月号（5月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛出荷頭数の減少により、牛肉生産量はかなり大きく減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003253.html

（EU）牛肉生産量の減少は24年も継続の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003254.html

（豪州）24年3月の牛肉輸出、米国のひき肉需要増が牽引^{けんいん}

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003255.html

（ブラジル）2023年の牛肉輸出量は前年をわずかに上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003256.html

◆豚肉

（米国）米国内外からの堅調な需要により、豚肉卸売価格、肥育豚価格ともに上昇

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003257.html

（カナダ）24年1～2月の豚肉輸出量、前年同期比15.4%増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003258.html

（中国）豚肉価格は引き続き前年同期比を下回って推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003259.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）24年2月の生乳出荷量、6カ月ぶりに前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003260.html

（豪州）23／24年度の生乳生産量は前年度を上回る見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003261.html

（NZ）生乳生産量、エルニーニョ現象による乾燥気候の影響で減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003262.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）トウモロコシ生産量は下方修正も、期末在庫は高水準を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003263.html

（世界：大豆）大豆期末在庫は下方修正ながらも高水準を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003264.html

（米国）米国のトウモロコシ消費量は増加、生産者価格は引き続き下方修正

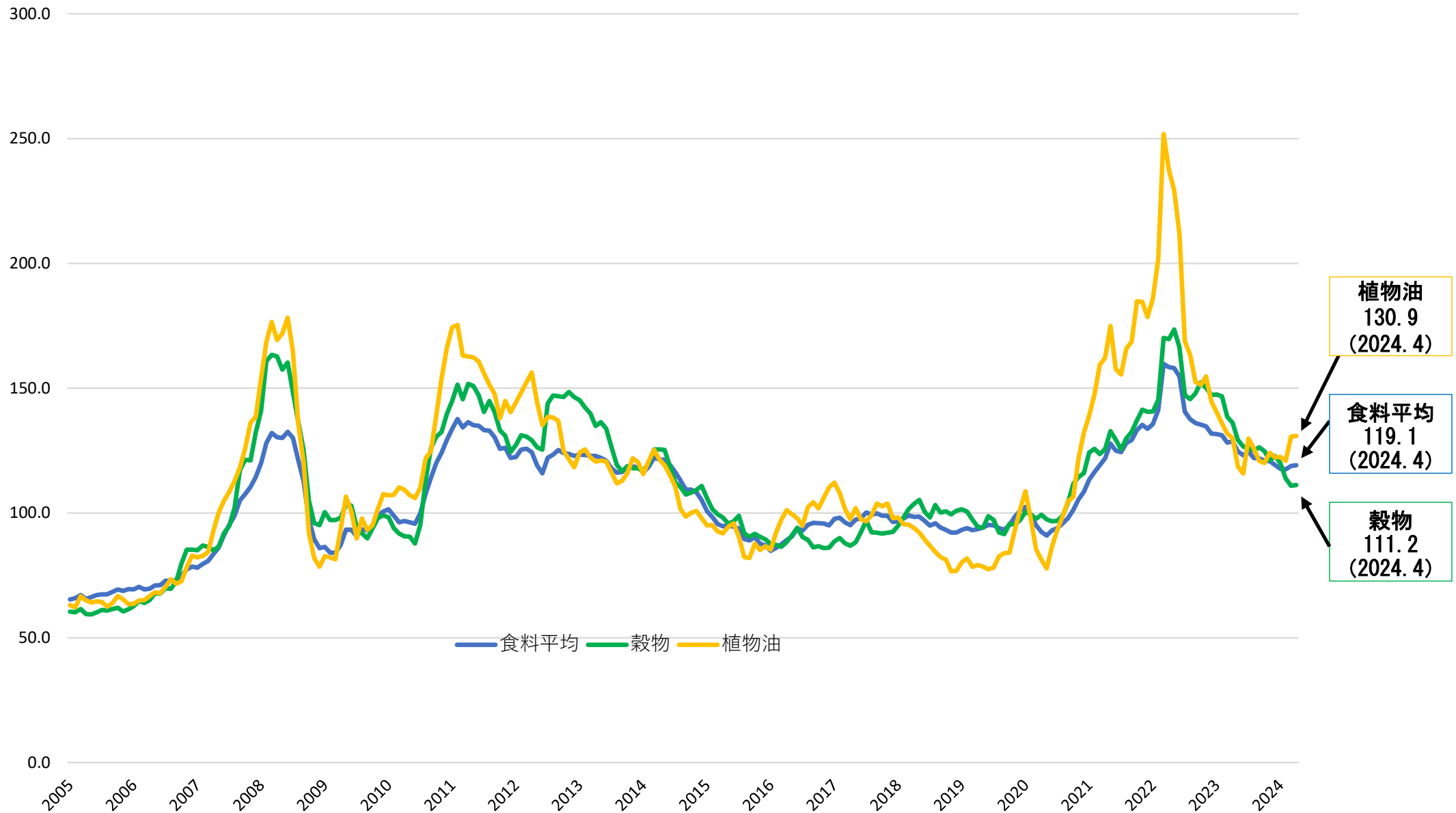
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003265.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003266.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.4)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

ブラジル便り③：ブラジルの代表的料理

今回は、人気のあるブラジルの代表的な料理を御紹介します。

1 シュラスコ

ブラジルの代表的な料理といえばシュラスコです。部位別に串刺しにした牛肉や豚肉に塩をまぶして炭火で焼き、焼きあがった串をスタッフが手に持って回ってきて、好みの肉を切ってもらいます。次々とテーブルに串を持ってこられるので、大量のお肉を食べることができます（写真1）。昔、牧畜が盛んなブラジル南部からアルゼンチンにかけて、ガウチョと呼ばれる牛追いの男たち（ブラジル版カウボーイ）がいて、彼らが牛肉を地面に串刺しにし、たき火で焼いて、ナイフでそぎ落として食べたのが始まりとされています。

写真1 シュラスコ料理店にて



2 フェイジョアーダ

また、フェイジョアーダも有名なブラジル料理です。土鍋に黒豆や牛肉、ソーセージ、豚の尻尾等を入れて煮込んだものをお米の上に載せて食べます。ブラジルでは、水曜日と土曜日の週2回だけ提供されるのが普通です。

写真2 「ポル・キロ」形式の料理



3 「ポル・キロ」形式

ブラジルのビジネスマンの昼食の定番は「ポル・キロ」形式です（写真2）。日本語に訳すと「キロ当たり」という意味で、量り売り形式で、バイキングのような取り放題になります。料理の品目ごとの細かい値段が設定されておらず、野菜ばかり取れば割安になるし、肉ばかりをとれば値段が高くなります。

4 カフェイージョ

ブラジル現地では、“ちょっとのコーヒー”を意味する「カフェイージョ」というコーヒーを小さなカップで飲むことが多いです（写真3）。ミルクは基本入れないで、砂糖をふんだんに入れているので、非常に甘いです。なお、ブラジルは、コーヒー、砂糖ともに世界一の生産・輸出国です。

写真3 ブラジルのコーヒーと砂糖



これまで3回にわたり、ブラジルの生産現場、輸送インフラ、食文化を御紹介してきました。地球の裏側の国ではありますが、日系人の方が多く、現地を訪問した際も、親近感を持って接していただきました。我が国にとって、大豆やとうもろこしの主要な輸入相手国であり、引き続き良好な関係を築いていければと思います。

文責：辻 貫志（農林水産省大臣官房政策課 食料安全保障室）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。

【データ・出典】

- ・和田昌親編著（2011）、「ブラジルの流儀 なぜ「21世紀の主演」なのか」、中公新書
- ・JTBパブリッシング（2018）、「ひとり歩きの会話集⑨ ブラジル・ポルトガル語」